

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

いっつか
別れの
その日
まで



それに初めに惚れたのは間違いない俺だった。

いつか別れのその日まで

※「もしもこの世が二度目なら」という本の番外のような話です
※上記の本と一部同じセリフ、やりとりがあります
※生前の挿絵設定を含みます
※18歳未満の方の所持・閲覧は禁止です

年端のいかない
少女の剣に



俺を見据えた
あの眼に



天真爛漫な
振る舞いに

戦場での
冷たさに

その呼ぶ声に
笑う顔に



いつまでも
変わることはない
その懐こさに

お前は誰よりも
おそろしいものを
持っているくせに

だから何ひとつ欠けてほしくなかった
(ただの私欲に他ならないことはわかっていた)

その最期まで揺らいでほしくなかった





邪な情欲に感わされて
汚されたくなかった

私はまだ
戦えます！

土方さ

だから

ゴホッ
ゴホッ

一回も
俺がすり



…寝てろ

じゃあな

沖田

その淵に立ってなお
失われることのない強さ
その時が訪れるまでお前が
前だけを見ていられるように
そう願ってられるように

だから俺は いつかあの世までこれを抱えて死んでいく

それを、



軽率だった
早まったのかもしれない

そういった手合いには慣れているつもりだった

下手を打つような真似はないと
素人のようなへまはしないと
それは直感のようなもので

慣れたはずの甘い空気
その作法はよく知っていた

ただ、

相手が悪かったただけだ



…土方、さ



はあ

あっ



は

はあ

あ



けれど時は既に遅く、

その日背筋を這う快感は
どこか背徳感に似ていたのを覚えている。

(そこには触れてはいけないものがあつたはずだった)



チッ



勢いで
手を出した
それだけだ



き

昨日のことなら
気にしてない
ですよ!



なんだって俺は
あいつにこんな話
なんぞ...

どうか
してるな



いっそ気にして
くれてるほうが
やりやすかった
んだがな



...ちったあ
気にしとけ

何されたと
思ってたんだ
あいつは。



何もなかったことにした方が
あいつにとっては幸せだろうか



そこに今まであったものを
崩してしまっただけは間違いなく俺だろう
その環境も、関係も

ああ、
あの日の姿が脳裏に焼き付いて離れない
触れた感触が未だ消えない



そこにあったのは紛れもなく
男と女だった

そう己が手で扱ってしまった

その事実を柄にもなく
確かめるのが怖いなどと

あれから数日何もできずにいる
何もなかったような日々を過ごしている



……いつまでも
はつきりしねえのは
気持ち悪いな



しぞう……



こんなに奥手
だったか？
俺は。



沖田いるか

あれー
土方さん！

おう



むしろその
原因は



…まったくこんな所に
世話になりやがって



…そんな所だ

へっ!?



なんです？
なかなか戻ってこない
私のこと心配してお迎えに
来てくれちゃったんです？

にょよよ



いやー
沖田さんってば
かっこ悪い！

俺が
原因か



違うん
ですよ
土方さん

そんな事を
言っほしい
わけじゃない
んです

忘れたいわけでもなくて (忘れられるはずもなく) 思い出だけで私の身体はこんなにも疼く

あの日の夜を、決してなかったことにしたいわけではないのです



「沖田總司」には解のないもの。

いけないことだ

でもそれはあつてはならない

だから間違いであつてほしかった
そうでなくちゃ、困るんです

馬鹿か

恋仲っつーのはな

ああ、私に触れる手がこんなに優しくなければよかった

いけないことを
するんだよ

二度もこんな風に触れられたなら
私はきつと期待してしまうから

甘く優しい言葉に、
きつと甘えてしまうから

ふあ

は

…ひじ
かたさ

ん

それがわかれば十分だった
ああそうだ、俺はどうしようもなくこいつが好きだった

(俺の直感もまだまだ鈍っちゃいねえと思うのすら野暮だった)









…知って
お母さん

ただ単純な言葉しか紡げなかった
気の利いた言葉も浮かばなかった

土方さん
不束者ですが
私のこといっぱい
幸せにして下さいね

それはいつかあの世まで
抱えていけるはずだった

それは再び出会うまで

この身はもう人のそれではなく
俺たちは確かに一度死んだのだ



(死してなお愛おしい、 などと)



なんでも
ねえよ

な！なに
笑ってるん
ですかっ



…これが

惚れた弱み
ってやつか



俺たちにはもう何も残せない
けれどもそれに後悔はなかった

自分で言えりや
心配ねえな



俺たちが今在る理由は
変わることはない

この甘やかさに
似つかわしくないほど
纏うにおいは消えない



未だ戦場に立ち続けることを望んでいる

いつか還ることを知りながら
あの世とこの世の狭間を生きている

たとえそれが確かなものになろうとも
何も変えられないように俺たちはできている
そうしてきっとあの世とこの世を廻っていく

けれどどうせいつかは還るなら、
この東の間を共に生きることくらい許されてもいいだろう

ささやかな、いとしい時間のために

もしもこの世が二度目なら
いつか別れのその日まで



Fate/GrandOrder unofficial fanbook#05

いつか別れのその日まで

2018.05.03 [わずら/麻野]

mail : miagorabbits@yahoo.co.jp

pixiv : 748432 / twitter : asnksk

print : 日光企画 様

無断転載やオークション及びフリマアプリへの出品等
一般の方、関係者様の目に触れる行為はご遠慮ください

はっ

あ

んっ

ひ
ふ

私の身体の奥底にある熱いもの
それは決して認めてはならないものだ。



きっと私はこれを認めたら
私は私でなくなって
今のままではいけない



私は私のこんな疚しきで
均衡を崩したくなかった
汚したくなかった

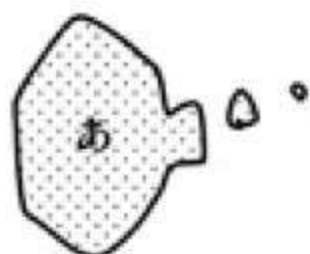




こんな私に
幻滅してほしくなかった



識っていたから
知られたくなかった



それでもずっと本当は
私に触れてほしいと思わずにはいられなかった



矛盾して
いるんです

私



この向けられた熱は私へのものではない
きっと女なら誰でもいいのだ

きっと、そうなのだ (そうでなくては、)

だから
もし

誰でも
いいのなら



今日は私でも
いいですか？

それが一度目の夜でした。